慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文学とジャンルの (不) 和 : 1990-2000年代の韓国におけるSFの位相
Sub Title	The (dis)agreement between literature and genre : the position of science fiction in Korea in the 1990s and 2000s
Author	金, 景彩(Kim, Kyongche) 孫, 眞元(Son, Jinwon)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.55 (2023.) ,p.21- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20231231-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

文学とジャンルの（不）和
――1990-2000年代の韓国におけるSFの位相――

金　景彩
孫　眞元

※韓国の人物名は，フルネームをカタカナで表記し，漢字名が確認できた場合にのみ，漢字名を〔 〕の中に記した。
※韓国語文献には，タイトルにのみ日本語訳を〔 〕の中に併記した。
※韓国語文献からの引用は，全て著者による翻訳である。

1. 問題提起――ジャンルの普遍性と特殊性

『82年生まれ，キム・ジヨン』（筑摩書房，2018）が火をつけた日本における韓国文学ブームは，韓国SFという新しい領域へと拡張しつつある。チョン・ソヨン『となりのヨンヒさん』（集英社，2019），キム・チョヨプ『私たちが光の速さで進めないなら』（早川書房，2020），チョン・ソンラン『千個の青』（早川書房，2021），『最後のライオニ　韓国パンデミックSF小説集』（河出書房，2021），チャン・ガンミョン『極めて私的な超能力』（早川書房，2022），キム・チョヨプ『地球の果ての温室で』（早川書房, 2023），キム・ボヨン『どれほど似ているか』（河出書房，2023）など，韓国で注目すべきSF作品が，次から次へと翻訳紹介された。「日中韓説話SFプロジェクト」から生まれたアンソロジー，『七月七日』（ケン・リュウ他，小西直子他訳，東京創元社，2023）も，韓国で出版された後，2023年6月には日本でも翻訳された。『SFマガジン』では《アジアSF特集》（2022年6月号）を組み，先立つ2009年に韓国のWebマガジンで発表されたキム・ボヨンの短編「0と1の間」を翻訳紹介する他，東アジアSFブックガイドにおいて，これまで日本で翻訳された韓国SF（に分類しうる作品）を積極的に位置づけた。

すでに多くの研究者・批評家が論じてきた通り，日本における近年の韓国文学ブームは，グローバルなレベルにおけるLGBTQ運動を受け，「フェミニズム・リブート（Feminism Reboot）」[1]の流れを汲む形で2010年代の韓国で爆発的に生産された「女性の物語」が，日本

1）ソン・ヒジョン〔孫希定〕（2015：14-47）は，2015年に発表した文章の中で，ネット空間で始まっ

でも一種の抵抗の基盤を作り上げるメディアとなったことによる。《韓国・フェミニズム・日本》特集で17年ぶりに重版となった『文藝』（2019）が，翌年の2020年から5回にわたって《連続企画　韓国・フェミニズム・SF》を設けたことからもわかるように，韓国SFは，フェミニズム小説が代表する括弧つきの「韓国文学」のサブジャンルとして，マイノリティ，LGBTQ，SDGsなど，「新しい価値観を繊細に扱う」[2] と同時に，「主張が強すぎず，物事を断定しない開かれた結末が（日本の読者にも）読みやすい」[3] ものとして，日本の出版市場に定着しつつあるのだ。本論文は，このように市場を拡大している韓国SFを「韓国文学」というコンテクストから理解しようとするものである。

あらゆる芸術作品は，普遍性と個別性を同時に有する。個々の作品は，それ自体特個的な遂行性をもつ代替不可能なものだが，それが受け入れられる際には，小説や詩，戯曲といった一般化可能なジャンル的枠組みの中で，ジャンルの慣習（genre conventions）への参照が必然的に伴われる。とりわけSFは，ジャンルの普遍性と個別性の問題が他よりも厳しく問われてきたジャンルである。それはSFが，科学に象徴される近代性・近代経験――普遍的でありながら，各地域において土着性をも帯びる――に由来し，SFを創作し，論じることが，近代という時間性の中に自らをいかに投影するかという問題と深く関わっていたからであろう。したがってSFを扱うことには，そのジャンルが特定の地域において登場し，展開された歴史的経緯への検討が必然的に要求される[4]。

SFが物語のジャンルである以上，その歴史は同時代の支配的な物語＝「韓国文学」との関係において考察されるべきである。そうすることによって初めて，文学と社会の関係に対する一般論――文学は社会を反映する――に陥らずに，またジャンル的特徴の普遍性に偏らずに，歴史的な事象――現実的であろうと虚構的であろうと――をめぐるさまざまな物語ジャンルの

たフェミニズムの大衆化傾向を「フェミニズム・リブート」と概念化した。新自由主義の時代に社会や制度に守られず，個人の力でサバイバルしなければならなくなった女性たちが，差別と抑圧を改めて認識し，メディアを通じて広範囲に及ぶ形でそれに抵抗するようになったことを説明するための用語である。

2）「『わたしたちが光の速さで進めないなら』から『千個の青』へ！　マイノリティ，LGBTQ，SDGs……新しい価値観を繊細に扱う韓国の若いSF作家たち【韓国新世代SF作家登場】」『Hayakawa Books & Magazines（β）』2021年10月27日（https://www.hayakawabooks.com/n/n9e14941ade2c，2023年9月25日閲覧）

3）「韓国SF，日本で相次ぎ翻訳刊行　エンタメ×純文学が魅力」『日本経済新聞』2023年9月16日（https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUD087VW0Y3A900C2000000/，2023年9月25日閲覧）

4）　とはいえ，これはSFジャンルに限られる問題ではない。長年韓国SFを研究してきたイ・ジヨン〔李知容〕（2023：3）は，ロジャー・ラックハーストの議論を検討しながら「1990年代以降，ジャンルがポスト構造主義を経て現代的に定義される中で，ジャンルの慣習（convention）とコードがむしろ緩い形で拡張するようになったことから，ジャンルを単一なコンテクスト，起源から規定するより，ジャンルに多様な可能性が介入してきたモーメントを捉えることがより効果的である」と指摘した。

布置から，物語の臨界，そこから展望される新しい物語のあり方を浮かび上がらせることができるだろうからである。これこそ，ダルコ・スーヴィン（Darko Ronald Suvin）がSFの意義であると論じた認識の異化（cognitive estrangement）[5] を物語全般に対して実践することに他ならない。

以上の問題意識のもとに本論文は，韓国SFの創作・批評が本格化した90年代から2000年代における韓国SFの歴史と位相を，当時の「韓国文学」論との関係から究明することを目的とする。それにより，文学一般論・SF一般論からは捉えることのできない，韓国SFの特殊なコンテクストを浮き彫りにさせ，究極的には韓国SFの日本における翻訳受容の現状に対する，批判的介入の糸口を探りたい。

2. 1990年代以前，SF受容のコンテクスト

1990年代の韓国における文学言説とSFの関係を捉えるためには，韓国でSFがいつ，どのように受容されたかを確認する必要がある。韓国におけるSF受容の歴史は20世紀初頭に遡る。周知の通り，20世紀初頭では，SF（Science Fiction）あるいは科学小説という新しい概念は，未だ登場していない。しかし，SF，科学小説の内容的・形式的特徴の原型を成す作品が流入し，韓国文学史という領土に科学的想像力が根を下ろすのに重要な役割を果たしたことは確かである。それゆえ，このパートで論じるSFの概念は，やや流動的であることを断っておく。

韓国における〈SF受容史〉の1ページは，1907年の朝鮮で紹介されたジュール・ヴェルヌの『海底二万里（Vingt mille lieues sous les mers)』（原作，1870）から始まる。日本に滞在していた朝鮮人留学生が発刊した雑誌『太極学報』に『海底旅行奇譚』というタイトルで翻案されて以来，植民地期（1910–1945）を通して多くのジュール・ヴェルヌの作品が翻訳・翻案された[6]。当時，小説は啓蒙の道具であった。結果，ジュール・ヴェルヌ作品の翻訳・翻案も，読者が作品を通じて西洋文物としての科学（Science）を理解し，科学技術が作り上げるだろうユートピアを夢見るよう誘導するために行われた（イ・ジヨン 2019：4–7)。

近代初期から植民地期において（その以降にも），多くの近代的な知識は「重訳」[7] を通じて

---

5) ダルコ・スーヴィン（1991：116）は，SFジャンルの新しさを次のように説明した。SFの新しさは，「物世界全体の変化を，あるいはすくなくともその世界のとくに重要な局面の変化を描くという意味で，『全体的視野』をもつ」が，「その結果，読者――すなわち私たちの時代に特有の〈人間〉像の諸タイプの代表――と，革新性によって導入される包括的ですくなくともあなどりがたい〈未知〉もしくは〈他者〉とのあいだに，SFの本質的緊張といえるものが生ずる。そしてこの緊張関係は，次に返す刃で，内包された読者の抱く，経験的規範を異化してしまう」。（強調は引用者）

6) 近代朝鮮におけるジュール・ヴェルヌの受容に関しては，金孝順（2020）に詳しい。

7) 中国語・日本語に翻訳されたものを再び朝鮮語に訳すこと。

受け入れられることが多かった。SFという，科学技術の発展からくる驚異を描くジャンルも同様で，この時期，中国語と日本語を読むことができる朝鮮の知識人層は，中国語・日本語に訳されたテクストからSFジャンルに出会えたのである。SFジャンルを媒介に流入し，拡散した近代的な科学知識が，とりわけ日本語・中国語が堪能な知識人に大きな影響を与えただろうことが容易に想像できる。このように，20世紀初頭のSFは，西洋文明のあり方とそれを支える科学的知識を理解し，追求するための一種のプロパガンダとして，近代朝鮮に受容された。

植民地解放と朝鮮戦争を経た冷戦下の韓国においても，SFは児童・青少年を啓蒙し，教育するためのツールとしてあった[8)]。冷戦秩序の中での「科学先進国」への熱望が，子供向けのSFに如実に表れたと言え，とりわけ1962年から政府主導で実施された経済開発5ヵ年計画の影響下でSFは，民族的・国家的目標である近代化を成し遂げるための「科学教材」として読まれるようになった（イ・ジヨン 2019：8–11）。1950年代末からは，児童・青少年向けの雑誌に多様なSF小説が翻訳（「重訳」を含む）・創作された。1965年に青少年のための科学雑誌『学生科学』が創刊されることで，SF小説の連載が本格化した。50年代に創作活動を始めたSF作家，ハン・ナグォンが活躍し，1969年には「韓国SF作家クラブ」が結成されるほど，児童・青少年向けのSF創作が活発であったが，その活況は長続きしなかった。

この時期の韓国SFは，専ら児童・青少年向けの読み物，出鱈目で幼稚な空想が盛られた，現実逃避と世俗的な欲望充足の道具として認識されていた。すなわち，「科学的思弁」を通じた人間と社会の探究という，SFに対する概念的理解とその意義が大衆の間でまだ共有されていなかったのである。現在もSFの訳語として多々用いられる「空想科学」という概念が，SFファンダムによって激しく批判される事態も，この時期の認識に由来する。SFというジャンルの意義がより哲学的な次元で認められるまで，主流文化の外にあったSFテクストは，創作者の例外的で単発的な奇想によるものとして扱われた。「被曝怪獣映画」の世界的な流行を受けて作られた映画『大怪獣ヨンガリ』（キム・ギドク〔金基悳〕監督，1967）や，女性だけが残されたディストピアを探検する小説『完全社会』（ムン・ユンソン〔文允成〕，1965）がまさにそうである。しかし，これらの映画・小説は，冷戦，核戦争，原子力に対する社会的な関心と不安から生まれたもので，当時の韓国の思考形態を窺わせる重要な題材である。

時代の支配イデオロギーを反映したいくつかのSF作品があったものの，近代初期から冷戦期に至る「韓国文学」の歴史およびキャノンの成立過程において，SFは常に議論の対象から排除されていた。制度面では，登壇制度を経てデビューした作家とその作品こそが真の「文学」であるという認識が根深く存在し，内容面では朝鮮（韓国）の歴史や民族に関わる問題，

8） 本論文では，現代韓国における「文学」とSFジャンルの関係にフォーカスするために，朝鮮民主主義人民共和国で創作されたSFについては論じない。ただ，朝鮮民主主義人民共和国を含む朝鮮半島でのSFの展開についてまとめている先行論として，イ・ジヨン〔李知容〕（2017：157–189）があることを紹介するに留める。

人間存在に対する哲学的な思惟を含むものをリアリズム美学で描き出したものだけが文壇に承認される構造があったからである。このように文壇制度の中で創作され，承認された文学が，韓国では「文壇文学」，「純粋文学」と称され，「韓国文学」とほぼ同義語として用いられてきた。文壇制度が包括しえず，または意図的に排除したさまざまなフィクションジャンルは，「文壇文学」や「純粋文学」の他者として分類され，別の名前が与えられた。ミステリー，ファンタジー，SF，ロマンス，武侠，ホラーなどを括る概念である「ジャンル文学」や，大衆の趣向に迎合したものを総称する「大衆文学」がそれである。

文壇がSF作品に目を向け始めたのは，卜鉅一の『碑銘を求めて』（1987）が登場した頃からである。帝国日本が戦争に勝利し，朝鮮に対する植民地支配が継続するという仮想の歴史を背景にしたこの作品は，作家本人も言及した通り，歴史改変SF（alternate history）に分類されるものである。しかし，「朝鮮系」の主人公「木下英世」が，失われた民族の言語と歴史を探していくという物語は，SFではなく，近代民族主義のナラティブを受け継いだ作品として評価された（クォン・ミョンア〔権明娥〕2002：35–57）。内地人男性との不倫で貞操を失った妻「節子」は，日本によって踏み躙られた民族アイデンティティのアレゴリーとして読まれ，「英世」が臨時政府のある上海に亡命するという結末には，純粋な民族共同体への想像が託された（ソン・ジヨン〔孫知延〕2006：59–79）。つまり，この作品は，SFとして書かれたにもかかわらず，歴史小説や「ポストモダン的」小説として文壇から大きな注目を浴びたのである。文壇内部の作家・批評家，そして読者にとってSFは，その概念定義と内容的・形式的特徴に慣れ親しんでいないジャンルだったのであり，また特定の作品を〈SFとして〉積極的に評価する必要性も未だ認識されていなかった。

SFを含む「ジャンル文学」の内容的・形式的特徴とその固有な意義が理解され，認められるためには，二つの条件が必要だったと思われる。一つは，「韓国文学」が自らの臨界を反省的に捉えなおすこと（「韓国文学」の自己更新），今一つは「ジャンル文学」が持続的に生産できる〈場〉が構築され，「ジャンル文学」の創作・流通・消費の範囲が拡大されることである。次節では，前者，すなわち「韓国文学」のイデオロギーが1990–2000年代において揺らぎ始め，「ジャンル文学」への認識が生まれるモーメントを捉えることとする。

3. 「韓国SF」の一条件——1990–2000年代における「文学」の揺らぎ

本節では，韓国SFというジャンルを浮上させた条件の一つとして，1990–2000年代の「文学」をめぐる言説がいかに変化したのかを検討する。それにより，韓国SFが従来の「文学」イデオロギーの臨界において，「文学」と不和を起こしながらもそれに応答する形で自らの場を構築したことを明らかにする。

90年代以前まで韓国文学は，いわゆる「大きな物語」としてあった。植民地時代，朝鮮戦

争，軍事独裁と民主化運動といった韓国現代史の節目を通過する中で，文学が歴史を変革しうる主体を想像／創造する場だったのであり，このような文学のあり方を集約させた概念が「民族文学」であった。キム・ミョンイン〔金明仁〕（2012：460）によれば，韓国における「民族文学」論は「植民地を歴史的条件とする近代的な国民文学論」である。すなわち「自主的に〈近代〉を成し遂げなかった植民地において，いかに近代的な民族国家を樹立するかという歴史的課題に取り組む」ものとして，韓国の「文学」が始まったという。したがって韓国における「文学」は必然的に，植民地経験から連なる奇形的な近代化プロセスが孕む問題（軍事独裁，階級矛盾など），冷戦構造の中の民族分断を解決し，西洋的近代に代わる価値を模索するという使命を担うことになる。SF のような「大衆文化」は，そのような問題に向き合う中では二次的なもの，真剣に扱うに足らないもの，国家主導の近代化論と結びつきやすいものとして，韓国文壇から排除されつづけたのである。他方で「民族文学」論は，民主化プロセスの中から生まれたものであると同時に，国家主義的な「国民」とは区別されるものとして，「民衆」概念に接近しながら民主化運動を支える知的基盤であった。

87 年の民主化宣言とその後の冷戦終結といった歴史の大きな節目となる出来事を受け，「民族文学」を中心に形成された韓国文学は，ポストモダニズム時代を迎えることになる。政治運動の主体としての民衆，それを支える理念としての「民族文学」の位相，意義が懐疑の対象となり，新しい時代に応答できる文学のあり方が議論され始めた。日本から輸入された国民国家批判の影響下で，「民族文学」を批判的に更新し，「世界文学」や「東アジア論」に深化・拡張させようとする動きが本格化するのもこの時期である。何より，「民族」「民衆」の影に隠されていた「大衆」概念は，この時期の変化を語るための重要なキーワードとなる。共通の理念を有しない，新しいテクノロジー（インターネットなどの通信技術）を基盤とする消費大衆の登場は，集団とは異なる趣向をもつ「個人」，そのような個人が生きる些細な「日常」を文学的な再現の対象として浮上させた。要するに 90 年代は，80 年代後半～ 90 年代前半の歴史の大きな転換（民主化・脱冷戦）を受け，既存の文学論が自己更新を図り，新しい文学が生まれるための土壌が培われた時期であった，と概括することができよう。では，2000 年代の「文学」はどうだっただろうか。

イ・グァンホ〔李光鎬〕（2005：162–164）は，90 年代と 2000 年代の文学を世代論的に区別できる客観的な指標は存在しないと言いつつも，二つの年代の文学の間には，80 年代文学との関係を巡って違いがみられると論じた。その内容を概略すれば，90 年代の文学は 80 年代文学に対する対立意識から生まれたため，「冷笑と偽悪の文学，内向と偽善の文学」となることで，80 年代文学に対する「逆方向的自己同一性」を追求したという。一方，2000 年代文学は 80 年代文学から比較的自由だったことから，先行世代を単に否定するに留まらず，「先行世代の文学的アイデンティティを構成していた要素の狭間で，排除されてきた文学的他者に目を向けることで，抑圧的なアイデンティティの構築原理に亀裂を生じさせる」ことができたという。

イ・グァンホの分析，中でも「抑圧的なアイデンティティの構築原理」への抵抗から2000年代以降の文学のあり方を捉えようとした点は，本論文の問題意識からして極めて重要である。なぜなら，「アイデンティティの構築原理」，すなわち主体性をいかに脱構築するかという問題こそ，2000年代の批評が「韓国文学」に期待したことであり，その問いにおいてSFをはじめとする「ジャンル文学」が「韓国文学」の中に組み込まれる可能性が生まれたと考えられるからだ。

2005年，文芸誌『文学と社会』は，早速2000年代文学の傾向を捉えるための座談会を企画する。「今や2000年代文学を語れる」（ソン・ジョンス〔孫禎秀〕他 2005：265–294）と題された座談会では，その後2000年代文学の特徴とされることになる主要な点が網羅されている。座談会で文学研究者のチェ・ソンシル〔崔成實〕は，「1980年代と90年代は，その時代を特徴づける有効な文学的類型があったが，2000年代の韓国文学は，類型学的分類に当てはまらない突然変異が自らの領域を開拓している」とした。それに対し，同じく文学研究者・文芸評論家であるイ・グァンホは2000年代文学の特徴として「有機的で系統がある美学」ではなく，「過剰さを貫く，系統のない美学」，「幻想的で惨いものたちの世界」，「雑種的で無国籍な感受性」を挙げた。突然変異，過剰，幻想性，雑種性，無国籍性などは，この座談会に限らず，2000年代文学から時代精神を読み込もうとした文芸批評，学術論文で散見される。これらの修辞は，「韓国文学」に対する新しい期待の表れでもある。それはすなわち，80年代までの――「大きな物語」に支えられる――「民族」や「大衆」，90年代の矮小化した「個人」でもない，他者性を積極的に導入した新たな主体性の模索である。ここでいう新たな主体性は，柄谷行人の説明を借りるならば，資本＝ネーション＝ステートという三位一体（柄谷 2010）に支えられる主体を脱構築した後に現れる主体性である。

同座談会では，2000年代に発表されたいくつかの小説作品が取り上げられた。例えば，日本でも翻訳出版されているピョン・ヘヨン〔片恵英〕の『아오이 가든〔アオイガーデン〕』(2005)[9]は，「自分とは初めから分離されている，排除された領域から出没し，自分を脅かすもの」を描くことで，「資本主義社会を基盤とする制度や国家，管理保護所のような装置の虚構性を暴露」（ソン・ジョンス〔孫禎秀〕他 2005：272）した作品として評価される。既存の主体がいかに批判的に描きなおされているかは，この時期の作品批評の最も重要な基準であり，批評家・研究家たちは2000年代文学に特徴的な題材や様式――突然変異，過剰，幻想性，雑種性，無国籍性などの言葉で説明される――に対し，「脱主体性」，すなわち主体の脱構築の観点からその意義を導き出そうとしたのである。それは文学思潮からすれば，近代小説の第一テーゼであるリアリズム（ペク・ジウン〔白志恩〕2015：38–39）を問いに付すことをも深く結びついていた。「文壇文学」＝「韓国文学」が「ジャンル文学」との出会いを予感することに

9） 日本語版：ピョン・ヘヨン，きむふな訳『アオイガーデン』東京：クオン，2017年。

なるのは，この地点においてである。文学研究者ソン・ジヨン〔宋知燕〕(2008) が，パク・ミンギュ〔朴玟奎〕の『카스테라〔カステラ〕』(2005)[10] とキム・エラン〔金愛爛〕の『달려라, 아비〔走れ，オヤジ殿〕』(2005)[11] について分析しながら論じた内容は，「韓国文学」が「ジャンル文学」に開かれる瞬間がよく表れている。

> 80 年代の大きな物語と，90 年代のミクロな日常性に大別されていた文壇の二分法を横断し，超える 2000 年代の韓国小説は，その砕けた世界を繋げようとする。(中略) 生の多様性を尊重し，それらと共鳴しなければならないこの時代に，地球に共に生きる別種〔引用者：人間ではない種〕と宇宙にある未知の空間など，我々が理解すべき事柄は無尽蔵にある。このような宇宙的発想が主導する学問のパラダイムは，何よりも人文学的想像力と小説の問題意識からアプローチする必要がある。これまでみてきたように，その役割を，韓国小説が果たしているということは，極めて重大で意味深いことである。(強調は引用者，444)

80 年代, 90 年代, 2000 年代の文学が差異づけられる中で, 2000 年代の文学は「非人間的」,「宇宙的」なものと接続する。この時点で「韓国文学」は，それまで「韓国文学」として扱われなかった SF を含む「ジャンル文学」を，文学の新たな価値――他者を通じて生の多様性を尊重し，新しい主体性を模索する――が見出される場として〈発見〉することになったのだ。2000 年代文学が,「頑固だった本格文学／大衆文学，リアリズム／モダニズム，民族文学／外国文学といった対立構図を壊し，多様な形のハイブリッド型文学へ進化しつつある」という診断 (作家と批評編集同人 2011：3) や,「ジャンル文学」から「新しい文学 (性) を作り上げようとする凄まじい冒険精神」を見出したチョン・ヨンフン〔鄭英勳〕(2008：83) の研究，さらには,「韓国文学」も一個のジャンルにすぎない (キム・ボンソク他 2004：1131-1168)，あるいは「ジャンル文学が上位文学〔文壇文学〕を乗っ取っている」(ユ・ヒソク〔柳熙錫〕2008：16) といった，当時の文壇からすれば大胆な言説の登場からは，当時の「韓国文学」が自らの外縁を拡張していき,「ジャンル文学」を「韓国文学」の一部に包摂しようとした動きが看て取れる。

しかし,「韓国文学」内部のこのような変化と,「ジャンル文学」への関心は，一定の限界を有しており，文壇の外で創作を続けてきた「ジャンル文学」の作家・批評家からすれば必ずしも喜ばしいことではなかったと思われる。なぜなら,「韓国文学」による「ジャンル文学」の理解は，単なる題材の新しさを評価するに留まっていたり，消費社会の中の素朴な日常におい

10) 日本語版：パク・ミンギュ，ヒョン・ジェフン他訳『カステラ』東京：クレイン，2014 年。
11) 日本語版：キム・エラン，古川綾子訳『走れ，オヤジ殿』東京：晶文社，2017 年。

ても小さな抵抗を続けるという，80–90 年代の文学が描いた主体のあり方と根本的には変わらない主体を，SF からも見出そうとしていたりしたからである。そもそも自らのアイデンティティを担保する確固たる基盤を有しないところに芽生えた 90–2000 年代の「ジャンル文学」からすれば，「韓国文学」からの期待はやや的外れなものだったのかもしれない。次節では，90–2000 年代に「ジャンル文学」，中でも SF が本格的に成長できた背景と，その中で育まれた SF が「韓国文学」に応答しながらも不和を起こしていた場面を分析する。

4. ジャンル文学の隆起と，SF ―文学の接触

4–1. サイバースペースから見出せた可能性

社会文化的状況が急変する中で，文壇中心の「韓国文学」に亀裂が生じ，周辺にあったさまざまな「ジャンル文学」が文壇の視野に入り始めた。そこには，前述した文壇内部の変化ももちろん主要な背景としてあったが，それだけではない。パソコン通信[12]の登場は，「韓国文壇」と「ジャンル文学」の関係の変化を促した，見落としてはならない要因である。

パソコン通信を通じてアクセスする電子掲示板（Computerized Bulletin Board System, CBBS）のようなデジタル空間は，文学の創作をめぐる諸制約を取り払い，自由な創作を可能にするとともに，受容者（読者）の欲求に素早く反応し，それを反映できる場として考えられた。オンラインネットワーク環境で行われる創作が，文学のあり方そのものを変えるだろうと予見する論者も多かった。1996 年に創刊された雑誌『バージョンアップ』は，通信文学[13]専門季刊誌であり，サイバースペースで創作される通信文学が，作者と読者の位階関係，権威的な文壇と出版市場の物理的な制限を超えたところで具現化される新しい文学のあり方を提示できると期待していた（ユン・ヨイル〔尹汝一〕2023：120–128）。このような中で，『バージョンアップ』に関わった人々が期待した文学のあり方と必ずしも一致するものではなかったが，これまで文壇の辺境にあった「ジャンル文学」が，パソコン通信の空間で存在感を示し始めた。サイバースペースで連載され，パソコン通信の利用者の間で流通していた作品の一部が単行本化し，読者から人気を集めるようになったのである。その代表的な例が，イ・ウヒョク〔李愚赫〕の『退魔録』（1993–2001 年に連載）であり，現在まで累計発行部数 1000 万部以上を記録している[14]。

創作をめぐるこのようなメディア環境の変化は，これまで「韓国文学」を支えていた民族，

12） ダイヤルアップ接続（dial-up Internet access）を利用して PC 間で通信すること。

13） 1990 年代，パソコン通信ネットワークを基盤に創作・消費された文学作品のこと。「PC 文学」「サイバー文学」ともいう。

14） 1998 年には同タイトルで映画化され，日本でも『ソウル・ガーディアンズ　退魔録』という邦題で 2000 年に劇場公開された。

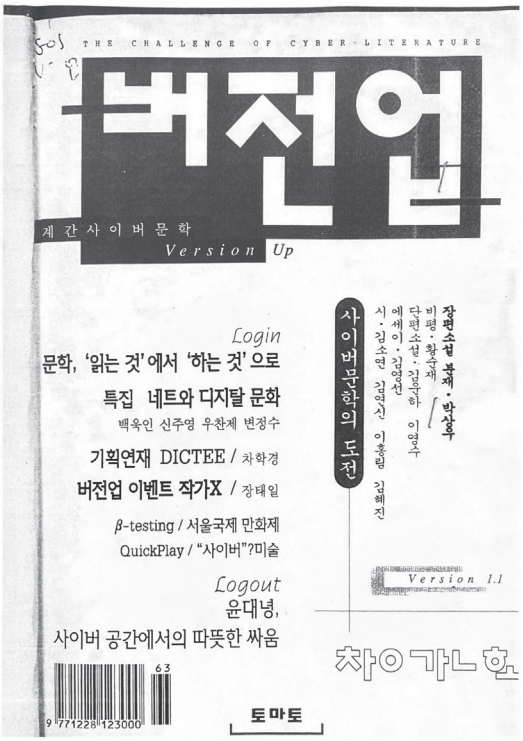

図 1　雑誌『バージョンアップ』の表紙

民衆などの，集団的共同性に基づく主体とは異なる主体のあり方を生み出した。それは嗜好共同体（taste communities）に象徴される，既存の集団的共同性から自由で，同じ趣味・趣向を共有しているという弱い連帯感（weak tie）で結束した，柔軟で独立的な主体である（Wellman and Gulia 1999：167–194）。1980 年代末から始まったパソコン通信サービスは，多様な嗜好共同体を形成させ，「韓国文学」が反省的に捉えつつあった暴力的な主体性をその外部において克服できる可能性の空間を生み出したのである。

とりわけ韓国 SF に関して注目すべきことは，パソコン通信を通じて集まった SF 同好会が，SF 小説のファンダムを構築するのに多大なる寄与をしたことである。Chollian[15] の〈すばらしい新世界〉（1989），HiTEL[16] の〈科学小説同好会〉（1992），UNITEL[17] の〈SF Odyssey〉（1998）

15）「千里眼」という意味で，1982 年に設立された株式会社・韓国データ通信が提供していたパソコン通信サービスの名称である。Chollian 以前は公共機関や金融機関などで業務用にのみ PC を利用していたため，Chollian は韓国内では初の個人向けパソコン通信サービスだったと言える。

16）株式会社・韓国パソコン通信が運営していたパソコン通信サービスである。1992 年にサービスを開始し，Chollian とともに 90 年代のパソコン通信文化の中心にあった。

17）1996 年からサービスを開始した第二世代パソコン通信の一つ。2020 年代初頭まで続いたが，2022

図２　HiTEL の電子掲示板

などのオンライン活動を通じて，SF ファンダムは SF 作品の翻訳・出版に積極的に関わった。SF 作品の創作と受容過程にファンダムが深く関与し，創作者・流通メディアと影響し合うという，国を超えて見られた現象が，この時期から韓国でも見られるようになったのである（ハン・サンホン〔韓相憲〕2022：252–255，259–263）。パソコン通信を媒介に結集した SF ファンダムは，SF が目指すべき理想と，ジャンル的性格について絶えず問い続け，SF の価値・位相にふさわしい作品の登場を待ち望んでいた。そして，パソコン通信という媒介・場は，それを可能にする土壌にもなった。

次節では，SF 専門作家群の登場により，ついに韓国 SF が自らの固有のジャンル的アイデンティティを獲得することになった背景を明らかにし，「文学」と SF の間の乖離・不和の様相がいかに変わったのかを捉えることとする。

4–2.「韓国 SF」の刷新から「韓国文学」の更新へ

1990 年代に入り，SF を専門とする出版企画者・翻訳家が登場した。彼らは SF 専門雑誌の創刊を通じて，SF の価値と意義を知らしめようとし，良い SF 作品が創作できる環境を作るために努めた。2004 年に刊行された SF 専門ムック本『Happy SF』第 1 号に載った対談には，当時の SF ファンダムの中心にあり，SF 出版の企画・翻訳・創作に関わっていた SF 評論家，作家，翻訳家，パソコン通信同好会の運営者が参加し，SF の基盤を固め，拡大するために行ってきたこと，悩んできたことについて語っている。この対談では，当時の「韓国文学」を危機状態に陥らせた問題，すなわち既存の主体をいかに批判的に捉え直せるか――脱構築できる

年 6 月 30 日にサービスを終了した。

図３ 『Happy SF』の表紙

か――という問題が取り上げられ，SF が既存の主体に対する代案的な主体（性）を提示する可能性について議論が交わされた。これは具体的には，韓国に「良い SF 作品」が少ない理由の検討と，その解決方法をめぐる議論であった（キム・サンフン他 2004：50–78）[18]。

彼らが待ち望んでいた「良い SF 作品」とは，SF ジャンルに対する真剣な理解に基づいて書かれたもの，言い換えれば，断片的な科学知識やテクノロジーを作中に取り入れるに留まらずに，世界を合理的に観察し，分析できる「科学的思考」を備えた主体を描いた作品である。『Happy SF』の創刊の辞で「「無毛の地」に他ならなかった国内の科学小説界で特別な位置を占めている」（3–5）と評されたデュナは，「良い SF」作家の代表であった。

Kim（2020：161–207）は，この対談の内容を分析する中で，「科学的思考」をもつ女性主人公を描いた SF 作家，デュナに注目した。デュナは，エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）の創作技法を模倣しながらも，ポーの作品や初期 SF 小説に見られるような，世界の全体像を体系的に理解しようとする欲望より，むしろ変化そのものを「科学的思考」で絶えず感知し，それに応答することで新自由主義経済体制の中で生き残ろうとする女性人物――デュナの作家としての個性の中核にある――を描き出したという。デュナは，その膨大な読書遍歴による SF ジャンルへの理解を示し，緻密な科学的論証に支えられる個性の強い作品を書き続けた，SF ファンダムが求めていた SF 作家の模範的事例だった[19]。

18）『Happy SF』を刊行した出版社・행복한 책읽기〔幸せな読書〕は，古典的な SF 作品の翻訳と創作 SF の出版に携わっており，出版社のホームページ（http://www.happysf.net/）では，創作作品を投稿できる掲示板も運営していた。

19） 日本では，デュナの作品中で次の三編が翻訳紹介されている。「追憶虫」（斎藤真理子訳，チョ・

しかしながら，デュナのSF作品は，『Happy SF』が望んでいた「良いSF」の基準を満たす以上の意義をもつものである。まず基本的な事実から確認すれば，デュナは，1994年にパソコン通信サービスのHiTELで作品創作を始め，現在も活発な活動を見せている作家である。インターネット空間の匿名性に頼って活動している彼／彼女は，自分について何も明かしていない。初期にはイ・ヨンスという名前を使ったことはあるが，その他に性別や年齢，学歴などについては全く知られていない。共同創作者がいることも確かでない。SF作家であり，映画評論家でもある彼／彼女は，『문학과사회〔文学と社会〕』といった文壇の季刊誌にも文章を発表し，「文学」と「ジャンル」を横断して活動した経歴をもつ。

このような彼／彼女がみせた創作活動は，韓国SFのジャンル的アイデンティティの形成に大きく寄与した。というのも，デュナの作品に描かれた女性人物やクィア性は，SFがヘテロセクシャルな男性の専有物であるという偏見と，SF作品に登場する人物のステレオタイプを破るものだったからである。実際，SF研究者のカン・ウンギョは，デュナが1994年からフェミニストSFの系譜に位置する作家を紹介してきたこと，フェミニストSFのアンソロジーに載せる作品の選定に関わったことに触れ，SFジャンルの慣習を韓国化する過程でデュナのフェミニスト的観点が主要な役割を果たしたことを明らかにしている[20)]。

Kim（2020）が，こうしたデュナの貢献と対比させながら提示するのは，イ・ソンスの事例である。パソコン通信の初期から多様なSF作品を書いてきたイ・ソンスに対して，この時期一部のファンから，作中の女性人物がみせる服従的な態度が時代錯誤的で，全体として民族主義的なファンタジーに満ちているという批判が加えられ，それが彼の作品をSFとして分類できるかという論争にまで発展した[21)]。これは，当時のSFファンダムが，イ・ソンスの作品に見られる民族主義的で男性的な主体を批判することで，国家・民族イデオロギーのプロパガンダ，あるいは啓蒙と教育のツールとしてあった韓国SF史の克服を図り，韓国SFの新しいアイデンティティとなる代案的な主体性を模索していたことによると考えられる。

韓国SFのアイデンティティが形成されつつあった20世紀末から21世紀初頭，サイバース

ナムジュ他『小説版　韓国・フェミニズム・日本』東京：河出書房，2020年），「盗賊王の娘」（斎藤真理子訳『文藝』59（4），2020年），「死んだ鯨から来た人々」（斎藤真理子訳，キム・チョヨプ他『最後のライオニ　韓国パンデミックSF小説集』東京：河出書房，2021年）。

20）1994年にデュナは，パソコン通信上の掲示板に，フェミニストSF作家として位置づけられるメアリー・シェリー（Mary Shelley），オクティヴィア・E・バトラー（Octavia Estelle Butler），ジョアンナ・ラス（Joanna Russ），ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア（James Tiptree Jr.）などを紹介した（カン・ウンギョ 2022：3–7）。一方，デュナは，1990年代を回想しながら，SFが想定されるより広い世界をもつものであることを示したいという思いから，女性SF作家を紹介する文章を書いたと述べた（シム・ワンソン 2022：222–223）。

21）パソコン通信に関わる資料は，SFファンダムのメンバーであるパク・サンジュン〔朴常俊〕，チョン・サンドンが所蔵し，運営しているアーカイブから得たものという（Kim 2020：170–175）。

ペースの登場と，ゲノムプロジェクトの開始，クローニングの動物実験の成功など，科学技術の発展に対する期待と憂いが膨れ上がった時期に，「韓国文学」はSFに注目し始めた。そこにはもちろん，前述したような「韓国文学」内部の変化が背景にあった。特に，第3章でも紹介した文芸誌『문학과사회〔文学と社会〕』は，2000年から度々デュナの文章を誌面に載せ，既存の文学制度の下では評価されなかった作家とジャンルに目配りし始めた。『문학과사회』のジャンル文学特集号に掲載されたデュナの文章はとりわけ注目に値する。彼／彼女は，ジャンル慣習に慣れていない「文学」の読者は，SF的な題材に関する基本的な概念を消化することにすら苦労し，すでにジャンル慣れした作家の隠された意図を見落とす結果になると語った。「SF関連の話題が盛り上がる際に頻繁に呼ばれる名前の一つになった」という彼／彼女のこの言葉（デュナ2004：1111）が，嘆きに聞こえるのは間違いではないだろう。

上記の文章でデュナは，SF作品をまともに理解できない読者をダーゲットにしているが，それより問題だったのは，SFの慣習に慣れていない「文学」批評家たちによる誤読であった。文芸批評家のソン・ミンヨプ（2000：1241-1242）は，専ら「文学」を評価するための価値基準，すなわち，近代的なヒューマニズムに基づいて，「世界と人間に対する省察を創造的に遂行するか否か」という基準によって，デュナの作品への批評を試みた。また，チョン・ソンウク〔田成煜〕（2007：140-160）は，デュナの作品が「逃避的なジャンル文学とは異なる」と見て，その意義を帝国化するる資本主義文化に対する批判に求めた。しかし，「ジャンル文学」の作家であるデュナが，SF，ミステリー，ホラーなど，多様なジャンル慣習に慣れていたこと，創作に参照したさまざまな既存の作品を作中でそのまま引用したり，創作後記に明記したりするといった方法で，SFのメガテクスト（megatext）[22]を大いに活用してきたことを考慮に入れなければ，従来の「韓国文学」の観念を反復することになってしまう。「文学」の批評家たちは，SFを読み解く理論的方法論を獲得することなく，ただ単に「文学」の価値に到達していない不完全なジャンル文学がいかにその未熟な状態から抜け出せることができるかを判断することに躍起になっていたようである。

SF（ジャンル文学）に対する「文学」側のこのような誤読ゆえに，ある作家が文壇内でSFを書いたにもかかわらず，自らがSF作家ではないと否定したり，その作家が書いた作品が「中間文学」，「SF的な技法を導入した」にすぎない作品と見なされたりすることも多かった。東亜日報社と韓国科学文化財団（現・韓国科学創意財団）が主催した公募「科学技術創作文芸」を通じて登壇したペ・ミョンフン〔裵明勳〕は，自分をSF作家としてデビューさせた公募の名前さえ「SF」という言葉を避けるためのものだったと明かす（シム・ワンソン2022：271）。SFとジャンルが文壇の中で格下げされた状況下で新しい世代のSF作家は次々

22） SF作品間の相互テクスト性を指す用語である。サイボーグ，超光速旅行など，特定の作家に独占されることなく共有される概念や設定を意味する。

と輩出され，現代に連なる歴史を作り始めた。「科学技術創作文芸」の公募で授賞し，SF 作家としてデビューしたキム・チャンギュ，キム・ボヨン[23]，ペ・ミョンフン〔裵明勳〕[24] の他，チョン・ボラ，チョン・セラン[25] など，今まで活発な活動を続けてきている作家たちは皆，Web マガジンを主な活躍の場にしていた[26]。SF 作家のキム・ボヨンは，SF やジャンル文学を掲載する誌面の少なさに苦労したと回想した（シム・ワンソン 2022：53–54）。

雑誌連載や正式な出版も望めずに創作を続けてきた SF 作家たちが注目され，SF が韓国の「文学」を構成する一軸として浮上したのは 2010 年代半ばのことである。「韓国文学」の中心・周辺の構図を再考し，「ジャンル文学」を「ジャンル」に基づいて読解しようとする試みが増えることで，主体をめぐる「韓国文学」の問題意識と，「ジャンル文学」の問題意識がついに連動するようになったのだ。

5. 終わりに

本論文では，韓国における SF が西洋の文物として朝鮮に流入し，国家・民族イデオロギーのプロパガンダを担った植民地期～冷戦期を経て，「ジャンル文学」に位置づけられ，徐々に文壇の中心に接近する様相を，「韓国文学」との拮抗関係から明らかにした。

日本においても，韓国 SF という新しいジャンルを理解するために，SF ジャンルの背景にある韓国現代史が多々参照される。例えば，《連続企画　韓国・SF・フェミニズム》（『文藝』2020 年冬号）に掲載された「現実を転覆させる文学――現地の編集者に聞く，韓国 SF 小説の軌跡」は，ムン・ユンソンの『完全社会』（1967）を韓国 SF の起源に位置づけながら，その根拠を次のように論じる。

> 韓国は地政学的な要因のために，歴史的に多くの問題を抱えてきた。何千年もの間中国の干渉下にあり，日本帝国主義の植民地時代を経て，朝鮮戦争，アメリカの軍政下時代，

23）日本では，斎藤真理子訳『どれほど似ているか』（東京：河出書房，2023 年）が最近翻訳刊行された。

24）日本では，ペ・ミョンフン，斎藤真理子訳「チャカタパの熱望で」（『最後のライオニ　韓国パンデミック SF 小説集』東京：河出書房，2021 年），斎藤真理子訳『タワー』（東京：河出書房，2022 年）が翻訳刊行されている。

25）日本で非常に多くの作品が翻訳紹介されており，代表的なものとしては，吉川凪訳『アンダー，サンダー，テンダー』（東京：クオン，2015 年），斎藤真理子訳『フィフティ・ピープル』（東京：亜紀書房，2018 年），斎藤真理子訳『保健室のアン・ウニョン先生』（東京：亜紀書房，2020 年），斎藤真理子訳『声をあげます』（東京：亜紀書房，2021 年）がある。

26）『환상문학웹진 거울〔幻想文学 Webzine 鏡〕』（http://mirrorzine.kr/），アジア太平洋理論物理センターが観光する Web マガジン『CROSSROADS』（http://crossroads.apctp.org/）が代表的である。

軍事政権，民衆化（ママ）運動を経験している。その間，文学は社会とコミットしながら，ときに規制権力への抵抗運動としての役割を担ってきた。男性中心社会を転覆させてみせた『完全社会』は文学としての役割を SF 的想像力で果たした結果である。（420）

しかし，韓国現代史の流れの中で文学が社会（政治）と結ぶ関係から韓国 SF の起源を説明する上記の記述では，韓国 SF に関わる欠かすことのできない事柄が見落とされている。それは，本論文で論じたように，韓国 SF が「文学」との一種の不和関係にありつづけ，「文学」によってときには排除され，ときには発見され，それに反発したり，応答したりしながら自らの領域を構築してきたという事実である。韓国 SF から「韓国文学」というコンテクストが消去される傾向は，日本で韓国 SF が語られる際に散見されるものであり，より視野を広げれば，欧米 SF のみを目指すべき到達点としてきた非欧米圏の SF 作品・批評全般にみられる傾向でもある。

さらに問題なのは，韓国 SF から「韓国文学」という歴史的コンテクストが削ぎ落とされる現象が，実は韓国 SF の作家たちによって促されている側面もあるということだ。例えば，連続企画《韓国・SF・フェミニズム》第 4 回目で企画された座談会「韓国 SF の新しい波」に招かれた韓国 SF の作家たち（キム・チョヨプ，シム・ノウル，チョン・ソンラン，ファン・モガ）は，共通して韓国の「文壇文学」との距離について語り，自らの作品を「文壇文学」＝「韓国文学」とは異なる〈新しい何か〉として位置づけようとした。これが，長い歴史をもち，現在も継続している「韓国文学」と「ジャンル文学」の〈不和〉に起因することは言うまでもない。「韓国文学」による「ジャンル文学」の誤読は依然として行われているため，「ジャンル文学」作家たちはそれと距離を取ることで，自らの意義を保とうとしているのである。

韓国 SF から「韓国文学」というコンテクストを消去することでどのような事態が起こるのか。コ・ヨンラン〔高榮蘭〕（2023：290–294）は，「K- 文学の日本語化」が孕む問題を，緩やかな共感によるマジョリティ社会の強化，「経験の均質化と個別的な歴史の忘却」という観点から論じた。違和感・不快感を感じさせず，気楽に消費できる共感のメディアとしての K- コンテンツは，歴史を忘却することで成り立っている。その結果，本来ならさまざまなノイズを起こし，自己認識・他者認識の更新を促すはずの文化の越境は，個々の歴史経験が意味をなさないフラットなグローバル消費社会に回収されてしまう。しかしながら，本論文が明らかにした韓国 SF の歴史からわかることは，韓国のナショナル・アイデンティティ（民族，国民，民衆といった，「韓国文学」が追求し，再現した主体性）と結ぶ関係によってその位相が常に変化しつづけてきたことである。そのような意味において韓国 SF は，「韓国文学」を常に問いに付すものであり，「韓国文学」からすれば一種の脅威でもあるのだ。本論文が，普遍的な価値を体現し，共感しやすいという「韓国文学」象に，「歴史」を介入させる実践の第一歩となることを期待する。

【参考文献】

—韓国語文献

イ・グァンホ〔李光鎬〕(2005)「혼종적 글쓰기 혹은 무중력 공간의 탄생—— 2000 년대 문학의 다른 이름들〔混種的創作あるいは無重力空間の誕生—— 2000 年代文学の別の名前〕」『문학과사회』18 (2), ソウル：문학과지성사, 154-172。

イ・ジヨン〔李知容〕(2017)「한반도 SF 의 유입과 장르 발전 양상——구한말부터 1990 년대까지의 남북한 SF 에 대한 소사〔韓半島への SF の流入とジャンルの発展様相——旧韓末から 1990 年代までの南北韓 SF 小史〕」『동아인문학』(40), 동아인문학회, 157-189。

———(2019)「한국 SF 서사와 문화사회학——근대를 위한 서사에서 탈근대의 서사로〔韓国 SF のナラティブと文化社会学——近代ナラティブから脱近代ナラティブへ〕」『비교문화연구』(55), 경희대학교비교문화연구소, 1-23 頁。

———(2023)「韓国現代 SF のジャンル的パラダイムと可変的特徴」2023 年度大衆叙事学会秋季定例学術大会資料集, 3。

解釈共同体編 (2007)『2000 년대 한국문학의 징후들〔2000 年代韓国文学の兆候〕』ソウル：산지니。

カン・ウンギョ (2022)「페미니스트 세계만들기 (worlding) 로서 듀나의 SF 에 대한 연구〔フェミニストの世界構築 (worlding) としてのデュナの SF に関する研究〕」梨花女子大学修士学位論文。

キム・サンフン他 (2004)「SF 는 주류문학의 대안이 될 수 있는가？〔座談会 SF は主流文学の代案になれるか〕」『Happy SF』(1), ソウル：행복한책읽기, 50-78。

キム・ボンソク他 (2004)「장르 문학과 장르적인 것에 관한 이야기들〔座談 ジャンル文学とジャンル的なものについての物語〕」『문학과사회』17 (3), ソウル：문학과지성사, 1131-1168。

キム・ミョンイン〔金明仁〕(2012)「민족문학론과 동아시아론의 비판적 검토——해방의 서사를 기다리며〔民族文学論と東アジア論の批判的検討——解放のナラティブを待ちながら〕」『민족문학사연구』(50), 민족문학사연구소, 456-480。

クォン・ミョンア〔権明娥〕(2002)「국사 시대의 민족 이야기——복거일『비명을 찾아서』〔国史時代の民族物語——卜鋸一『碑銘を求めて』〕」『실천문학』(68), ソウル：실천문학사, 35-57。

コ・ヨンラン〔高榮蘭〕(2023)「번역의 불 / 가능성과 K 문학 -일본어로『82 년생 김지영』과『난장이가 쏘아올린 작은 공』을 겹쳐 읽다〔翻訳不／可能性と K- 文学——日本語で『82 年生まれ, キム・ジヨン』と『こびとが打ち上げた小さなボール』を重ね読みする〕」『뉴래디컬리뷰』3 (1), 뉴래디컬리뷰, 276-304。

作家と批評編集同人 (2011)『키워드로 읽는 2000 년대 문학〔キーワードで読む 2000 年代文学〕』ソウル：작가와비평。

幸せな読書編集部 (2004)『Happy SF』(1), ソウル：행복한책읽기。

シム・ワンソン (2022)『우리는 SF 를 좋아해〔私たちは SF が好き〕』ソウル：민음사。

ソン・ジヨン〔孫知延〕(2006)「植民地女性と民族共同體の想像——卜鋸一『碑銘を探して』を中心に」『COMPARATIVE LITERATURE』(40), 한국비교문학회, 59-79。

ソン・ジヨン〔宋知燕〕(2008)「차이들의 우주적 네트워크—— 2000 년대 한국소설의 패러다임〔差異たちの宇宙的ネットワーク—— 2000 年代韓国小説のパラダイム〕」『한국문학이론과 비평』12 (4), 한국문학이론과비평학회, 419-448。

ソン・ジョンス〔孫禎秀〕他 (2005)「좌담 이제 , 2000 년대 문학을 말할 수 있다〔座談 今や 2000 年代文学を語れる〕『문학과사회』18 (4), ソウル：문학과지성사, 265-294。

ソン・ヒジョン〔孫希定〕(2015)「페미니즘 리부트〔フェミニズム・リブート〕」『문화 / 과학』(83), ソ

ウル：문화과학사，14-47。
ソン・ミンヨプ（2000）「소설로서의 과학소설〔小説としての科学小説〕」『문학과사회〔文学と社会〕』13（3），ソウル：문학과지성사，1241-1242。
チョン・ヨンフン〔鄭英勳〕（2008）「장르문학과 본격문학이라는 시빗거리〔ジャンル文学と本格文学という論争の種〕」『창작과 비평』（140），ソウル：창작과비평사，69-83。
デュナ（2004）「SF 문학의 오늘――‘일반’의 부재〔SF 文学の今日――〈一般〉の不在〕」『문학과사회〔文学と社会〕』17（3），ソウル：문학과지성사，1111。
ハン・サンホン〔韓相憲〕（2022）「1990 년대 한국 SF 소설 팬덤의 문화 실천〔1990 年代韓国 SF 小説のファンダムによる文化実践〕」『한국현대소설학회』（87），한국현대소설학회，252-255，245-270。
ペク・ジウン〔白志恩〕（2015）「2000 년대 소설에서 ‘환상’을 사유하기〔2000 年代小説において〈幻想〉を思惟する〕『Journal of korean Culture』（29），고려대학교 한국언어문화학술확산연구소，38-39。
ユ・ヒソク〔柳熙錫〕（2008）「장르의 경계와 오늘의 한국문학〔ジャンルの境界と今日の韓国文学〕」『창작과 비평』（140），ソウル：창작과비평사，12-30。
ユン・ヨイル〔尹汝一〕（2023）『모든 현재의 시작 , 1990 년대〔すべての現在の始まり，1990 年代〕』ソウル：돌베개。
―日本語文献
柄谷行人（2010）『トランスクリティーク――カントとマルクス』東京：岩波書店。
金孝順（2020）「韓国における科学小説の受容：ジュール・ウエルーヌ作，李海朝述譯『科学小説鉄世界』の啓蒙性と科学的想像力を中心に」東アジアと同時代日本語文学フォーラム・高麗大学校日本研究センター編『跨境：日本語文学研究』（11），高麗大学校日本研究センター，29-45。
スーヴィン ダルコ（1991），大橋洋一訳『SF の変容――ある文学ジャンルの詩学と歴史』東京：国文社。
―英語文献
Kim, Dahye (2020) Techno-fiction: Science-fictional Imaginaries and the Technik of Writing in Contemporary Korea, Unpublished doctoral dissertation. McGill University. Montréal. Canada.
Wellman, Barry & Gulia, Milena (1999) Virtual Communities as Communities: Net Surfers Don’t Ride Alone. In M. A. Smith, & P. Kollock (Eds.). *Communities in Cyberspace*. London: Routledge.
―ウェブサイト
「『わたしたちが光の速さで進めないなら』から『千個の青』へ！　マイノリティ，LGBTQ，SDGs……新しい価値観を繊細に扱う韓国の若い SF 作家たち【韓国新世代 SF 作家登場】」『Hayakawa Books & Magazines（β）』2021 年 10 月 27 日（https://www.hayakawabooks.com/n/n9e14941ade2c，2023 年 9 月 25 日閲覧）
「韓国 SF，日本で相次ぎ翻訳刊行　エンタメ×純文学が魅力」『日本経済新聞』2023 年 9 月 16 日（https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUD087VW0Y3A900C2000000/，2023 年 9 月 25 日閲覧）